Ｄ＆Ｇ読書会　2005/02/17, 03/03　担当：大久保歩

ジャックデリダ、『コーラ』（守中高明訳、未来社、2004 年）

前書き　（5 頁）

『コーラ』、『パッション』、『名を救って／名を除いて』：ある与えられた名についての三つの試論　／　与えられた名に、受け取られた名に、支払うべき名に、到来するかもしれないものについての試論　／　人が、名に、名の名に、すなわち異名に、そして義務（与えることあるいは受け取ること）の名に、負うているもの（与えねばならないあるいは犠牲に捧げねばならないもの）についての試論

エピグラフ　（7 頁）

ジャン=ピエール・ヴァルナン、「神話の理性」、『古代ギリシアにおける神話と社会』所収からの引用

神話：曖昧なものの論理、両義的なものの、極性の論理と呼ばれ得る一つの論理形式を作動させる←→哲学者たちの無－矛盾の論理

→二項性の、然り（oui）か否（non）かの論理ではないような論理、ロゴスの論理とは別の論理

序文　（9-12 頁）

コーラ：われわれに訪れる、その名として。

→一つの名がやって来る：その名は、名以上のもの、名の他者、他なるものを語り、それらの侵入を告げ知らせる

告知：誰も約束することなく脅かすこともない － ただ切迫だけに名をつける

コーラ：「二項性の、然りか否かの論理」を挑発する － 「ロゴスの論理とは別の論理」に属す － 「感性的」でも「叡智的」でもなく、「第三の類（ジャンル）」（triton genos）に属す

→コーラについて、これでもなくあれでもない（排除の論理）[1] とすら言えず、同時にこれかつそれである（分与の論理）[2] とすら言えない

←排除の論理と分与の論理の間の二者択一性は、かりそめの外見とレトリック上の制約に由来し、名づけることへの何らかの不適性に由来する

呈示され＝現前している限りにおけるコーラについての言説：自然なあるいは正当なロゴスから生じてはおらず、雑種交配的で私生児的、頽廃しているような推論（logismô nothô）から生じている

→このような言説は神話に属するのか？　またしてもロゴス／ミュトスの二者択一性に頼るの

[1] not A and not B
[2] A and B

か？
←→コーラの思考：第三のジャンルの言説を呼び招く？
→第三のジャンルへの呼びかけ：ジャンルの彼方にある一つのジャンルへ向けて合図を送るための迂回の時間？ – さまざまなカテゴリーの彼方、カテゴリー的対立措定の彼方にある、一つのジャンルへ向けて合図を送るための迂回の時間？

ヴァルナンへの一つの問いのオマージュ：ロゴスの規則性、その法、その自然なあるいは正当な系譜を超え出るものでありながら、それでいて、ミュトスには属さないものをいかにして思考すればよいのか？ – ロゴスとミュトスの対立措定に場を与えつつ、みずからが位置づける当のものの法には従わない、そんなものの必然性を、いかにして思考すればよいのか？ – それは名づけることの可能性に対して何らかの不可能な関係を持っているのではないだろうか？

I （13-40 頁）

［13-17 頁］
揺れ動き：二つの極の間の揺れ動きではなく、二種類の揺れ動きの間で、すなわち、二重の排除（..... でもなく..... でもなく）と分与（同時に..... であり、これかつそれである）との間で、揺れ動いている
→この超–揺れ動きの論理：換喩（メトニミー）によって、存在者の諸ジャンル（感性的／叡智的、可視的／不可視的、形相／形相なし等々）から言説の諸ジャンル（ミュトス／ロゴス）にわれわれは移動させた
← 1. とりわけプラトンにおいて、言説の資格は、その言説が語る存在の資格に由来するから
2. 換喩がみずからを正当化するのは、ジャンルを経由することによってであるから
コーラについての言説：類（ジャンル genos）についての、そしてさまざまな種類のジャンルについての言説である
→二つの種類のジャンル：1. 存在の二つのジャンル（不易にして叡智的な／滅びやすく生成状態にあり感性的な）に対する triton genos[第三のジャンル]　2. 性的なジャンル＝ジェンダー – 「母」「乳母」
←レトリック – とりわけ名づける可能性の – 問題：位置づけられるものであるよりも位置づけるものである – 能動的なるものと受動的なるものとの文法的あるいは存在論的ななんらかの二者択一からそれを逃れさせねばなるまい、そんな対立措定
→コーラ：メタフォリカルな意味／本来的な意味という極性の彼方あるいは手前へ赴く → コーラについての思考：ミュトス／ロゴスという類同的な極性を超え出てしまう
→コーラについての思考：極性の秩序そのものを、極性一般の秩序そのものを、不安に陥れる – さまざまな対立措定に場を与えつつ、その思考それ自体はいかなる逆転にも従わない
←コーラの思考が、不変にそれ自体であるだろうからではなく、その思考が、意味の極性の彼方に到達することによって、もはや意味の地平にも、存在の意味としての意味の地平にも属さないだろうから

［17-29 頁］
コーラ：われわれはこの名をあらゆる翻訳から保護したままにしておいた
←思考することと翻訳すること：同一の経験＝実験を貫いている – ただ単に一つの呼称ないし一つの意味の原子だけでなく、同時に、ある譬喩的＝転義的テクスチャーの全体に関わり、この「譬喩的＝転義法」の諸要素に、名づけるべく接近する方法に関わる
→コーラの翻訳（「場」、「用地」、「母」、「受容体」等々）：解釈の網目にとらわれたままである – さまざまな遡行的投影から帰結したもの。投影の時間錯誤性（アナクロニスム）

→コーラのための正しい語を提案しうると主張しているのでもなければ、それ自体に呼びかけうると主張しているのでも、それ自体に接近しうるなどと主張しているのでもない
←転義法と時間錯誤性は構造的に不可避 – コーラの名は、正しい語ではない
←コーラ：時間錯誤的。存在における時間錯誤、それどころか存在の時間錯誤「である」。存在を時間錯誤化する

『ティマイオス』の解釈の歴史：この総体の単一性ないし同一性を前提すること、なんらかの秩序化された理解においてそれを全体化することは、問題外
←秩序の推定（集結、単一性、一個のテロスによって組織化された全体性）：構造的な時間錯誤性と本質的な結びつきを持っている – コーラのような何か [quelque chose comme] によって生み出された避けがたい効果
←この何か：何か［quelque chose］ではなく、あたかも［comme］何ものでもないかのようであり、それが向こうで – その名の彼方で – それであるだろうところのもののようですらなく、つまりはそれ自体ですらない

『ティマイオス』の諸解釈：コーラの意味作用あるいは価値を知らせに [informe] やって来る – つねに、コーラを限定しつつ、それに形を与えること［donner forme］に存する
←→コーラ：あらゆる限定から逃れることによってのみ、あらゆる刻印ないし印象から逃れることによってのみ、みずからを差し出しあるいはみずからを約束する

「コーラ」：1. 転義的あるいは解釈的翻訳の諸類型によって損なわれたり手をつけられるがままにさえなることは決してなく、まして傷つけられたり汲み尽されるがままになることは決してない　2. 解釈に安定した基体あるいは実体の支えを提供しているとはいえない – 主体［sujet］でもなく、基底材［subjectile］でもない
←コーラ：接近不可能で、平然としており、「不定形」で、つねに手つかず＝処女的、擬人論に根源的に反抗するような処女性をそなえており、解釈学的諸類型を受け取り、それらに場を与える受容体・場としてのコーラ：一つのエイドス［形相］の安定した存在ではなく、それは存在せず、存在の二つのジャンルに属してはいない – ただ、みずからを告げ知らせるだけ
←→ 受け取ることや与えることといった擬人論的図式を通して捉えられたり抱懐されたりされてはならない

コーラ［khôra］：われわれは今や、慣習どおりにコーラというもの［la khora］とは言わず、「コーラ」という語、概念、意味作用、価値と言っているのでもない

1. 定冠詞［la］：あるものの存在を、コーラという存在者をあらかじめ想定する
   ←→コーラ：哲学的言説によって、存在論的ロゴスによって、知られ、認知され、受け取られているようないかなるタイプの存在者をも指し示してはいない – 感性的でも叡智的でもない – コーラはある［il y a khôra］、しかし、そこにあるものは存在しない［ce qu'il y a là n'est pas］
   ←ある［il y a］：場を与え［donnant lieu］、あるいは思考すべく促がしつつも、何一つ与えているわけではない – ここに es gibt の等価物を見るのは危険（否定神学に巻き込まれたままの es gibt）
2. コーラという語、普通名詞、概念、意味作用、価値：さまざまな区別（語／概念、語–概念／物、意味／指向等々）をあらかじめ想定しており、それらの区別自体が、少なくとも、一つの限定された存在者の可能性を前提している – 指示作用や表示作用といった諸々の言語行為は、一般性に、多様性の秩序に訴える
   ←→コーラ：一つのものではない「何か」が、これらのあらかじめの想定と区別こそを問題化している – 多様性の秩序を逃れ去る

コーラ：依然として一つの名、一つの固有名詞、一つの語
→一人の女性に帰せられるように見えるが、しかし、その指向対象は実在しない – 存在者の諸性質をそなえていない
→冠詞の消去：不可視の括弧と、一つのＸとの間で、限定を宙吊りにする
→このＸ：何一つ固有なものとしてはもたず、不定形なままにとどまるという固有性をそなえている – 何ものでもない、特異な非固有性 ← コーラが保持しなければならないもの、コーラのために保っておく必要があるもの
→コーラ：一般性の中に混交しない必要がある – 受け取るべきではなく、ただみずからの受け取る固有性を与えられるがままになるべきである
←つねに同一の言葉遣いを保つ：同じやり方でそれについて語りかつ呼ぶこと

［29-32 頁］
コーラに関するさまざまな解釈や再自己固有化：ティマイオスの言説の後を追って、いったい何が、プラトンのテクストとともにではなく、コーラそれ自体（このＸ）とともに起きているかを、再現しているように見える
– すべてはあたかも、コーラの諸解釈の来るべき歴史＝物語［histoire］が前もって書かれ、それどころかあらかじめ定められており、コーラ「それ自体」を「主題とする」『ティマイオス』のいくつかのページの中で前もって再現されかつ省察されているかのように、起きている
→解釈の歴史＝物語：みずからをプログラムし、再現＝再生産し、反射＝省察している → 前もってみずからを消去している ← 歴史という概念は、目的論的プログラム化作用をみずからのうちに孕んでいないから

コーラ：ありとあらゆる限定を、それらに場を与えるべく受け取るが、その限定のうちのどれ一つとして固有のものとして所有することはない – その「うえに」、その主体にじかに、みずからを書き込みにやってくるものの総体ないしプロセス「である」が、しかし、それは、それらすべての解釈の主題あるいは現前する支持体ではない
→支持体の不在（不在の支持体や支持体としての不在ではない）：あらゆる二項的あるいは弁証法的な限定を、つまり、哲学的類型による臨検を、すなわち、存在論的類型による臨検を、惹き起こしかつそれに抵抗する
→場を与えること：一つの場所の贈り物をすることに帰着しない – 何かの支持体あるいは起源たる、与える主体の身振りを指示するわけではない

［32-40 頁］
われわれの問い：コーラの思考は、「哲学者たちの無–矛盾の論理」には明らかに属さないが、だからといってその思考は、神話的思考の空間に帰属するのか？
→長い迂回：ヘーゲルの思弁的弁証法が神話的思考を目的論的パースペクティヴの中に書き込むやり方の検討
ヘーゲルの弁証法：無–矛盾の論理であり、かつそうではない – それとしての矛盾を統合し止揚する [relever] [3] – それとしての神話的言説を哲学素の中に止揚する

哲学が真面目なものになるとき（ヘーゲル）：哲学が論理への確実な道に足を踏み込む瞬間から、つまり、みずからの神話的形式を放棄した後、すなわち止揚した後から – プラトン以後、プラトンとともに – 概念がその神話論的な眠りから目覚めたとき。潜在的な力の中に包まれていた哲学素を明示化し意識化するとき
→目的論的な前未来時制[4]：神話素は、その弁証法的な Aufhebung［止揚］へと差し出され約束された、前–哲学素にすぎなかったということになるだろう［n’aura été］ – 物語の時間。物語の外部への出口についての物語。語りのフィクションの目的＝終わりをしるしづける
←真面目なものと不真面目なものとの対立措定：それとしての哲学とその遊戯–神話論的偏流との対立を覆い隠す

二つの解釈のあいだでのヘーゲルの揺れ動き：神話の機能＝ 1. 哲学的不能性のしるし、それ自体としての概念に到達しそこにみずからを繋ぎとめることの不可能性のしるし　2. 弁証法的なそしてとりわけ教育的な力の指標、すなわち、哲学素をあますところなく所有している真面目な哲学者による教育上の支配力
→両者に共通している点：言説の形式としての神話が、記号表現された概念の内容に、つまり、その本質において哲学的なものでしかありえない意味というものに、従属している – 哲学的テーマ、すなわち記号表現された概念は、つねに法の力、すなわち言説の支配力ないし王朝であり続ける

[3] ヘーゲル哲学の要となる用語。A と B という矛盾し対立する 2 項を、同時に否定しかつ保存して、より高度な次元に向かう運動を指す。たとえば、『法哲学』においては、家族と市民社会という矛盾する 2 項が国家において止揚される、と叙述されている。
[4] フランス語の時制。未来のあるときまでに完了しているであろう行為を表す。

このような論理的–哲学的評価：プラトンには適用されない – このような評価はすでに、ある種の「プラトニスム」に属している
→論理的–哲学的評価のプログラム：すでに『ティマイオス』の中に読み取れるが、しかし、それは一つの留保を除いて – このプログラムに棲みつき、それを保護し、そしてそのことによって、そこから逸脱しているかもしれない留保

『ティマイオス』のプログラム：あらゆる事柄についての知の円環を走破する、宇宙開闢説
→その百科全書的な目的：存在するすべてのものに関して、ロゴスの終わりを、テロスをしるすこと
この百科全書的ロゴス：全般的な存在論 – 死すべきものあるいは不死なるもの、人間的なものと神的なもの、可視のものと不可視のものとが、そこに位置づけられる

『ティマイオス』の半ば：コーラについての言説は、感性的なものと叡智的なものとのあいだで、一方にも他方にも属さない、空虚な空間を開いてしまったのではないか？、 深遠あるいは亀裂を名指したのではないか？ – 感性的なものと叡智的なもののあいだ、さらには身体と魂とのあいだの分割が起こり、場所を占めることができるのは、この亀裂から発して、この亀裂「において」ではないか？

『ティマイオス』の存在論的–百科全書的な結論：この書物の中央に開いた亀裂を覆い隠してしまう – たんに叡智的なものと感性的なものとのあいだ、存在と無のあいだの深淵ではなく、ロゴスとミュトスのあいだの深淵ですらなく、これらすべての対［カップル］と、もはやそれらの他者ですらないようなある他なるものとのあいだの深淵

書物の中央に一つの亀裂が存在すること：一つの深淵化＝入れ子化［mise en abyme］が言説構成の一定の秩序を決定していることと関連するのではないか？ – この深淵化＝入れ子化が諸々の場所についての言説の諸形式に影響を及ぼしていること、とりわけ政治的な場所に、すなわち、さまざまな場を言説の諸類型あるいは諸形式を割り当てられた場とみなすことによって制御された、場所の政治の全体に影響を及ぼしていることに関連するのではないか？